

臨床実習における本学CT装置の活用状況(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	佐野 友昭, 細川 洋一郎, 大西 隆, 田中 力延, 飯沼 英人, 南 誠二, 篠崎 広治, 金子 昌幸
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	109
発行年	2005-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00009899/

3954TとOA発症の関係が $p=0.0007$ で有意を示した。また、OA発症には複数の遺伝子多型が関連している可能性が示唆された。

今後、顎関節OA患者および健常人における、OA関連遺伝子多型

IL-1 β C3954Tの発現率を比較検討するとともに、複数の遺伝子多型の検索を行う予定である。なお、DNAは頬粘膜SWAB法を用いて抽出する予定である。

北海道医療大学歯学部附属病院における悪性腫瘍入院患者の臨床統計的観察

○富岡 敬子*, 柴田 考典*, 有末 眞**, 武藤 壽孝*, 永易 裕樹**, 平 博彦**, 村田 勝**, 奥村 一彦*
*北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座, **北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座

【目的および方法】北海道医療大学歯学部附属病院病棟が、1980年6月2日に24床で使用開始されてから2004年12月末までの24年間に入院した悪性腫瘍患者87例を対象に性別、年齢、紹介の有無、年間当たりの症例数、合併疾患、原発部位、組織型、TNM分類、治療、予後について調査・報告した。

【結果】1. 性別は男性57例、女性30例。2. 年齢は28歳から89歳で平均は64.5才であった。3. 紹介の有無は、紹介「あり」78例(89.7%)に対し「なし」9例(10.3%)で、「紹介」78例の内訳は、歯科診療所42例、他歯科口腔外科13例、医科診療所6例、院内4例、不明13例であった。4. 年間当たりの症例数は1~6例で、最頻値は3例であった。5. 合併疾患は58例(66.7%)でみられ、循環器疾患24例、代謝性疾患18例(糖尿病12例、高脂血症6例)、肝疾患7例、呼吸器疾患6例、脳血管障害5例、消化器疾患と他臓器癌各3例であった。6. 原発部位は「舌」32例、「歯肉」32例、「口底」9例で、以下、「頬部」「口蓋」各4例、「耳下腺」「その他」各2例、「上顎洞」「口腔粘膜」各1例であった。7. 組織型は87例

中、扁平上皮癌70例、腺癌5例、悪性リンパ腫4例、悪性黒色腫2例、粘表皮癌2例、不明4例であった。8. 治療は74例に実施し、外科療法64例(うち化学療法併用が46例)、化学療法単独8例、放射線療法単独と放射線と化学療法の併用が各1例であった。9. TNM分類: 扁平上皮癌70例中、一次症例は64例で、そのうちTNM分類を判定した症例は46例(71.9%)であった。その内訳は「T2」23例、「T4」11例、「T3」7例、「T1」5例、いずれも「N0M0」が最も多く、それぞれ21例、6例、4例、5例であった。なお、TNM分類を判定しなかった18例中17例は、1992年以前の症例であった。10. 予後: 扁平上皮癌一次症例でTNM分類されている46例中、治療を行った43例では、2004年12月末時点で生存23例、死亡14例(原病死7例、他病死4例、不明3例)、不明6例で追跡率86%であった。なお、1994年から1999年までに外科治療を行った20例では、術後5年経過時点で生存13例、死亡7例(原病死3例、他病死4例)で、追跡率は100%に向上していた。

臨床実習における本学CT装置の活用状況

○佐野 友昭*, 細川洋一郎*, 大西 隆*, 田中 力延*, 飯沼 英人*, 南 誠二**, 篠崎 広治***, 金子 昌幸*
*北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座, **みなみ歯科医院, ***しのぎき歯科医院

【目的】平成15年10月、本学にCT装置が導入されてから1年以上が経過した。CT導入の目的としては臨床的活用が主であるが、その他に研究的活用と教育的活用も忘れてはいけない。特に、教育的活用として歯学部学生に装置の構造、検査手順、そして、画像の読影を理解してもらうことは臨床教育上重要であると考えられる。今回我々は、平成16年歯学部臨床実習生に初めてCT撮影実習を導入したのでその活用状況について紹介することを目的とした。

【方法】対象は平成16年度臨床実習の歯学部5年生である。CT実習は木曜日の午前中に行った。撮像は断層厚2mm、管電圧140kVp、管電流130mA、撮像方式はガントリー0度のスパイラルを基本としたが、撮像上アーチファクトを避ける目的で任意の角度にガントリーを傾斜させるコンベンショナルな単純CTも行った。撮像実習に際して以下の点について配慮した。1) 被験者全員に承諾書

を作成した。2) 撮像範囲は必要細小範囲とした。3) 撮像した写真は個々の班内だけで使用した。4) 臨床上必要であるなら貸し出しを行った。

撮像終了後、必要であるなら再構成画像を作成し、写真をプリントアウトした。CT写真は他の画像写真と比較し読影に供した。

【結果】実習期間中に撮像された被験者は実習参加者90名(男性69名/女性21名)中、23名(男性21名/女性2名)であった。1班当たりの平均は2.7名、1班で最高4名、最低1名であった。部位別では上顎洞12件、上顎智歯2件、下顎智歯12件、顎関節1件であった。

【考察】臨床実習におけるCT実習は、装置の構造や検査手順の理解、そして他の画像検査(回転パノラマ、デンタル写真)と比較することで病態の本質を理解するうえで必要であると思われる。

授業を通じた医療事故防止対策の取り組み

○大山 静江*, 小田島千都子*, 沢辺千恵子*, 岡橋 智恵*, 長田 真美*, 五十嵐清治***
*北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校, **北海道医療大学歯学部小児歯科学教室

【目的】平成15年12月に厚生労働省より「厚生労働大臣医療事故対策緊急アピール」が発出されて医療安全は医療政策の最重要課題の

ひとつに位置づけられた。そこで本校では、学生の事故防止に対する意識を高めることを目的として授業の中でヒヤリ・ハット(イン